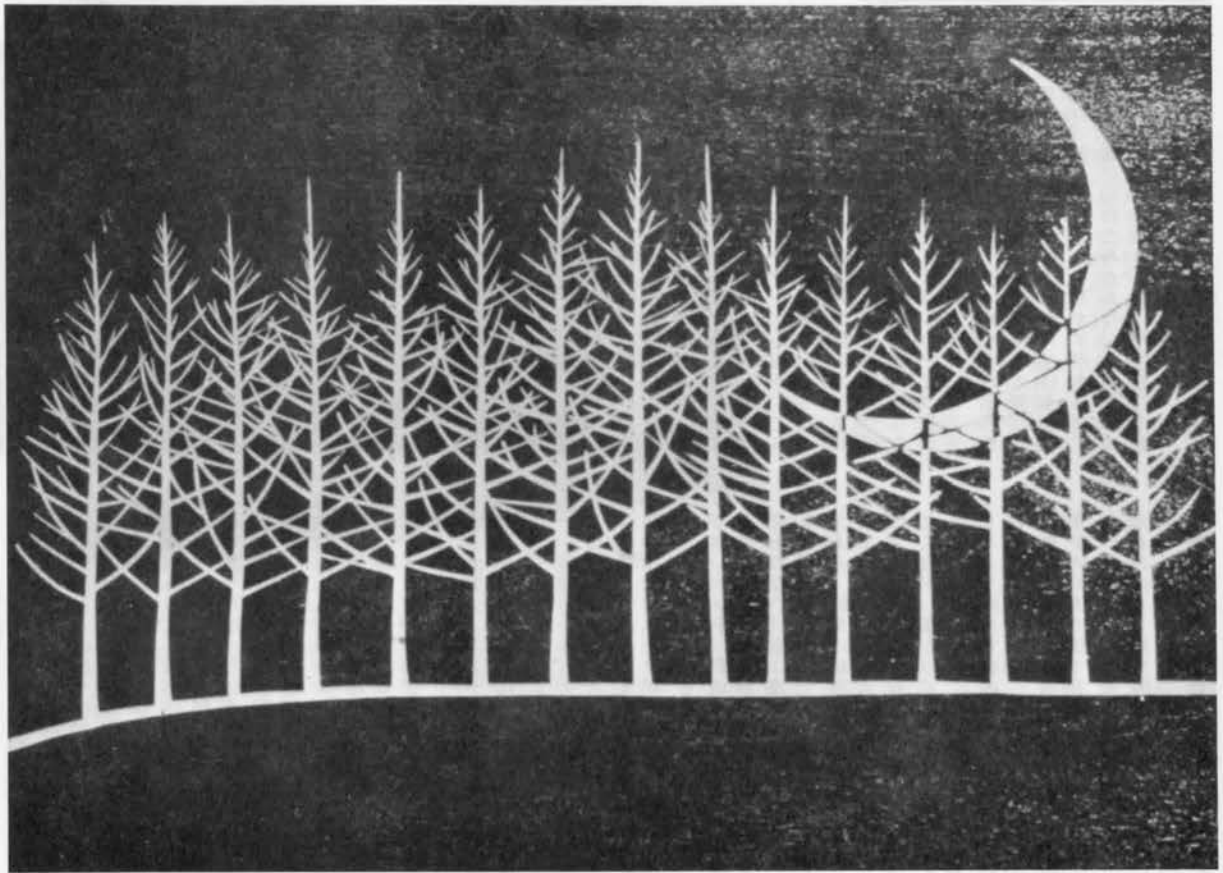


山と博物館

第28巻 第8号

1983年8月25日

大町山岳博物館



弓月 板絵 齊藤 清

オオヤマサクラと私

青木湖の南端の国道沿に大正十年頃「オオヤマサクラ天然地帯 長野県」と書いた白のペンキ塗りの立派な角柱が、昭和十五年頃まで立ててあった。ここは国道と湖との間が狭かったため桜の木は薪などに伐られずに保存されていたが、昭和十九年、青木湖の河水統制により、これらの桜の大木の根が水に洗われ湖面に倒れ枯死してしまった。さいわいその付近に実生の若木が数本あった。それが今現在のサクラである。昭和四十四年頃からさかんに保存方法を考えるべきだとその声が高まり、昭和四十六年の春私は市教育委員会の職員数名と青木湖、中綱湖周辺にあるみことな桜の木二十一本を選び市の天然記念物にすることに於いて地主の承諾を得た。昭和四十六年十二月十日付で大町市文化財保護条例第二条の規定により指定書が当該地主に届けられた。私は市が指定したサクラの中から良質の種子を採取し発芽と育苗の研究をはじめた。この研究をはじめるとは、関係の諸先生方をお訪ねし助言をいただくうちに、育苗の自信がついてきた。三〇%の発芽をみた時はこの上もない喜びであった。しかし大量の生産はなかなか思うようには進まなかった。一〇〇%発芽と育苗が可能になったのは今から三年ほど前のことである。経験を生かし今後も育苗に努力していきたいと思っている。

また、私は苗の植付けも必要だと思いが、付近の山々に点在しているみことな桜の木を伐らないような運動も今後は必要だろうと考える。

オオヤマサクラがヨシノサクラより優れている点をあげると、花の色が赤く色鮮やか、テングス病に強い、小鳥に花芽を食害されない。紅葉が他の木より早く期間が長い。木材として赤色があって艶があるなど。

今年市がオオヤマサクラを市内の公共施設に植付けをした。私にとって長い間の希望がみのつた年でもある。

(大町山岳博物館協議会委員 西沢聖賢)

野草シリーズ

秋の草花

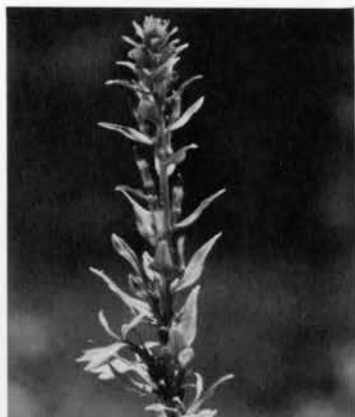
保 尊 裕 之

「秋の野に咲きたる花を指折り、かき数うれば七草の花」

「秋の花、尾花葛花おしなはななどしこが花、女郎花むすめなはな、また藤袴、朝顔あさごが花、山上憶良 万葉集 巻八 秋の雑歌 一五三八番

ここで尾花というのはススキのことでありアサガオは今日のキキョウであるというのが定説である。したがって現代風に作りかえたと「ハギ、ススキ、クズ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウ、ナデシコ、これぞ七草」裕之作ということになる。

右は秋の野草の代表七種を歌ったものである。冷涼な澄んだ秋の空気の中に色鮮やかに咲く秋草の花は万葉の時代から多くの人々に愛され、余りにも有名な憶良の歌は言うに及ばず数多くの短歌や俳句にうたわれている。ちなみに万葉集に歌われている植物の中で最も多いのはハギの歌で百四十二首に及んでいる。また、ススキが四十六首、ナデシコが二十六首、クズが二十二首、オミナエシが十四首、キキョウが五首、フジバカマが一首といった具合である。



サワギキョウ

さて次に「春の草花」のときに做って、安曇野周辺で目につく主な秋草を紹介しよう。

一、田畑や路傍の花

・アキノノゲシ(キク科) 花がハルノノゲシに似ているのでアキノノゲシという。葉の切れこみに特徴があり、淡黄の菊花を茎上に房状につける。葉に切れこみのないものがたまにあり、これをホソバアキノノゲシという。

・タウコギ(キク科) 花は筒状花だけで目立たない。田の畦際などに生え、果実が動物や人の衣服について散布される。似たものにアメリカセンダングサがある。北アメリカよりの帰化植物で、田の畦や水路付近に多く、果実はやはり動物の体や衣服について散布される。茎が紫色を帯びていること、丈が高いことで区別できる。

・メナモミ(キク科) この植物の果実もやはり総苞のつもの線毛の粘液により衣服につく。似たものにコメナモミがあるが、こちらは茎に毛がないので区別できる。

・ガンクビソウ(キク科) 花の形がガンクビ(キセル)に似ていることでこの名がついた。同じ仲間にはヤブタバコがある。こちらは葉がタバコの葉に似ているのでこの名がついた。花の形はよくにている。

・ノコンギク(キク科) 田の畦や川の土手などに多く、紫色の菊花を沢山つけて美しいふつう野菊と呼ぶが単にノギクというものはない。似たものにユウガギクがあるが、こちらは葉に切れこみがあり、茎が上部で枝分れし、斜めに張り出し、花色も白く数も少ないのですぐ区別できる。

・ヒヨドリバナ(キク科) 秋の七草の一つであるフジバカマに似た花をつける。フジバカマは中国より移入されたもので野生ではない。似たものにサワヒヨドリがあり湿地や河川敷に生えるがこちらは枝分れをしなない。高原や山地にはヨツバヒヨドリがあり花は何れもよく似ている。

・キキョウ(キキョウ科) 秋の七草の一つとして誰でも知っている花。盆花として仏前に供えられる。根は薬用となる。白花品や八重咲のものが花壇に栽培されている。

・ツリガネニンジン(キキョウ科) 野や山麓の草地に多く、花は淡紫色の釣鐘形で根は薬用人参に似ているのでこの名がある。若芽はトトキと呼んで山菜の一つとして食べ根は薬用とする。

・オミナエシ(オミナエシ科) 秋の七草の一つで小さな黄色の花を茎頂に沢山つける。この辺では粟粒のような花よりアワバナと白い盆花の一つにあげられ仏前に供える。似たものにオトコエシがある。こちらは白い小花をつける。オミナエシは女飯めかひで粟の飯のこと。オトコエシは男飯で米飯のことだという穿った説もある。

・クズ(マメ科) 野山のどこにもあり繁殖力すざましい植物で、秋の七草の一つとは思われない。根は漢方薬葛根湯の原料となる。根からとったデンプンが本物のクズ粉である。紅紫の蝶形花が房になってつく。

・ナンテンハギ(マメ科) 葉の形がナンテンに、花がハギに似るのでこの名がある。また二枚ずつ葉がつくことからフタバハギともいう。似たものにヨツバハギやエビラフジがあり何れも春の若芽は山菜として利用される。

・ボタンズル(キンポウゲ科) 小葉の柄の部分がつる状になって他の草木にからまり、白い花を沢山つけ美しい。花弁のように見えるのはガク片で四枚ある。似たものにセンニンソウがある。これは有毒植物だが、扁桃腺炎の薬として葉が利用されている。



フシグロセンノウ

・イヌタデ(タデ科) アカマンマの名で親しまれている。ママゴト遊びの赤飯に使われるのでこう呼ばれる。イヌタデというのはホシタデのように利用価値がないのでイヌとついた。似たものにオオイヌタデがある。丈は一メートル近くにもなり、穂も大きく垂れているのが特徴である。

・ミソソバ(タデ科) 名前のように田の水路など溝端に多い。葉がホコ形で、ピンクから赤までの花色をもち、コンベイ糖状に小花をつける。似たものにママコノシリヌグイがあり、こちらは茎に鋭い刺が逆方向についていて非常に痛い。このことからこんな残酷な名がついた。

・ツルボ(ユリ科) 野原、畑のふち、墓地などに群生する。三十程の花茎に穂状にピンクの小花を沢山つけて美しい。葉は細長く、根本に二枚向き合っている。花のつき方や様子はヤブランによく似ている。ススキ(イネ科) 秋の七草の一つで誰でも

知っている草である。穂の形状が動物の尾を連想させるのでオバナと呼ばれた。似たものにオギがある。ススキは乾いた場所に生え穂は白く株をつくる。オギは湿地に多く、穂は銀白色で株をつくらない。

・エノコログサ (イネ科) ネコジヤラシの別名もあり多くの人に知られている。同様にムラサキエノコロやアキエノコロがある。
 ・チカラシバ (イネ科) ビンを洗うブラシ状の黒紫色の穂が人の目を引く。道路端など人の踏み固めたところに多い。

・メガルガヤ (イネ科) 刈草には二種あり、オガルガヤとメガルガヤだがメガルガヤの方が風情があり一般に愛される。川原の土手など乾燥地に多い。

二、山麓や山地の花

・アキノキリンソウ (キク科) 山麓や山地に多く穂状になった黄色の菊花は美しい。ペンケイソウ科のキリンソウに花の感じが似ているのでこの名がついた。高山にはミヤマアキノキリンソウがある。

・ヤクシソウ (キク科) 山麓などに多い。ニガナのような黄色の花が枝先に群がりつく葉のもとの方が茎をとりまくようについているのが目立つ。

・オケラ (キク科) 山地の草地にたまたま見かける。花の下の苞葉が魚骨状であるのが面白い。若芽は山菜として、根は薬用として利用される。

・オクモミジハグマ (キク科) 花の穂がハグマに似て、葉がモミジ形で主に中部以北に多いのでこの名がついた。

・タムラソウ (キク科) 花はアザミにそっくりだが茎や葉にアザミのような刺がなく別の仲間である。

・ヤマボクチ (キク科) 葉がゴボウに似ているのでゴボウツバと呼ばれている。花はアザミのようで大きく、総苞がクリのイガ状で目につく。葉はコムギ粉の代りにソバのつなぎに利用する。似たものにハバヤマボ



ハンゴンソウ

クチがある。根もとの葉の基部がホコ状に張り出しているのが区別できる。
 ・ナンブアザミ (キク科) この辺から北部に多い。北部にあつて南部とはおかしなが南部は岩手県を示す。

・フジアザミ (キク科) 山のガレ地に生え最も大型のアザミで目をひく。根はゴボウのようにして食べられる。この辺でヤマゴボウといつて漬物にして売られているのはモリアザミの根である。

・ハンゴンソウ (キク科) 春にヤマソといつて山菜として食べたもの。背丈程にのびては分枝して沢山の小さな黄色の菊花をつける。似たものにキオンがある。こちらは葉に切れこみがないのですぐ分る。

・モミジガサ (キク科) 春に山菜として食べたもの。八十程程の茎が伸び頂上に白色の筒状花を沢山つける。似たものにヤブレガサがあるがこちらの方が大型である。

・シラヤマギク (キク科) 山地に多く、葉が

卵形で茎が紫色を帯び、枝を分けて白い菊花を沢山つける。若芽はムコナといつて山菜の一つで食用にする。似たものにゴマナがある。大きな株をつくり、花も枝先に群がりつく。やはり山菜の一つである。
 ・サワギキヨウ (キキョウ科) 沢ぞいの湿地や湿原に生えるのでこの名がある。紫色の美花をつける。一つ一つの花は不整形でキキョウには似ず変わった形をしていて目を引く。

・ツルニンジン (キキョウ科) 最近薬用として万病に効くように宣伝されて根を掘りとする者が多いが薬効はそれ程でない。蔓は他からまり、折ると白い液を出し、いやな香がある。花は大きな釣鐘形である。似たものにパアソプがあるがこちらは葉に毛があり区別できる。ツルニンジンは別名ジイソブという。

・ヒキオコシ (シソ科) 山麓の陽地に多い。花は小さく見ばえはしないが、葉草の一つで生薬名は延命草という。同じ仲間クロバナヒキオコシがあり、白馬、小谷に多い花がや、大きく黒紫色をしている。やはり葉ががく、胃腸薬とする。

・ナギナタコウジュ (シソ科) 山麓などに日のあたるところに多く、花穂の片側だけに花がつき、全体が弓なりになり、ナギナタの刃を連想するのでこの名がある。紅紫色の花は案外美しい。やはり葉草である。

・テンニンソウ (シソ科) や、大型の草で、ヤマアジサイに似た葉をつけ、茎上に長い穂をつくり、黄色の花を沢山つける。メシベとオシベが長くつき出しているので目立つ。

・アケボノソウ (リンドウ科) 谷間の湿気の多い所などに時々見かける。星形の花の花弁の模様は何ともいえない美しさである。アケボノの空にまたたく星を連想させる。葉の色も明るい緑で美しい。

・ツルリンドウ (リンドウ科) 茎が蔓になつて地をはつたり、他物にからまつたりして淡紅の花をつける。花後中から紅い大きな果実が顔を出すので、この時が人目を引く。
 ・リンドウ (リンドウ科) 晩秋の野草の代表で紫色の美しい花をつけ、日を受けて開く。根は健胃剤として薬用になる。似たものにエゾリンドウがある。こちらは花が葉のつけ根に何段にもつく特徴をもつ。

・ツリフネソウ (ツリフネソウ科) 湿った地に生え名前のようにコピトの舟をつつたように見え紅紫の花が目立つ。似たものにキツリフネがあり湿った木陰に群落を作る。鮮黄の花がよく目につく。

・ウメバチソウ (ユキノシタ科) 茎頂に白い梅のような一花をつけ美しい。ハート形の根生葉もよく調和して愛すべき山草の一つである。葎の途中で一枚の葉をつける特性をもつ。似た仲間シラヒゲソウがある。こちらも山の湿った日陰に生え、白い五枚の花弁は細く裂け、白い鬚を連想する。ハート形の葉が茎に数枚つく特性をもつ。
 ・ヤマトリカブト (キンポウゲ科) 花の形が舞楽の伶人が頭にかぶる冠に似ているのでこの名がついた。紫碧色の花は大変美しいが全草が有毒でとくに根は猛毒である。高山にはホソバトリカブトがあり、近頃は花の美しいハナトリカブトが栽培されているが何れも猛毒であるので注意されたい。

・サラシナショウマ (キンポウゲ科) 山の木陰や草地などに生える大形の草で、白いブラシ状の花穂はとくに目をひく。茎葉には強い臭いがある。若芽を水に晒して食べるのでこの名がついた。葉草の一つである。
 ・フシグロセンノウ (ナデシコ科) 朱色の大きな花は誰の目にもよく触れる。夏の終りから秋にかけての山地の花の代表である。似たものにエンビセンノウがあり、花弁が裂けていて燕の尾状である。やはり朱赤色の花をつけ美しいが少ない。

(大町山岳博物館嘱託)

大町市のフロラに新しく加わった植物

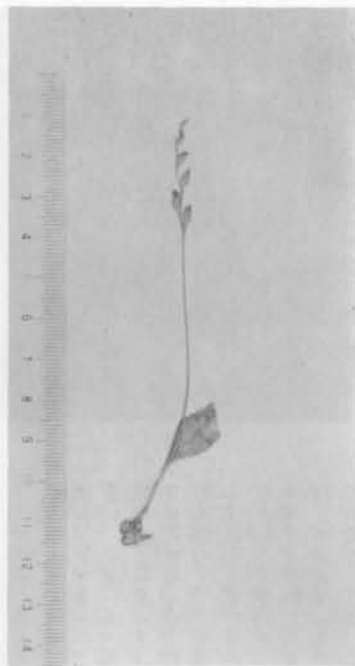
吉沢 健

大町市の植物相(フロラ)の研究は、北アルプスを中心に多くの植物研究者によって明らかになってきた。そしてその集大成として一九六九年、高橋・中村・平林によって大町市を含んだ「白馬・後立山連峰とその東方山麓のフロラ」が発表された。その後十年以上経過し筆者が調査した地域で、大町市に從來記録されていないいくつかの植物が発見された。

・ミスズラン(ラン科)

亜高山帯の針葉樹林内に稀にはえる地生ランで、矢部吉楨氏が一九〇二年八ヶ岳で採集し、この標本に基づいて前川文夫氏により新種として命名された。その後百瀬静男氏が鉢伏山、尾山喜貞氏が浅間山でみつけている。近年、木曾山脈空木岳や飛騨山脈大滝山でもみついている。しかし、いずれも産地は長野県内に限られている。このことから和名は信濃の枕詞「水簾刈る」に由来しているが、現在のところよくあてはまっている。

大町市で新しくみつかった産地は飯鬼岳の前衛、大風山の二一〇〇付近の針葉樹林下



である。草丈十一センチ程の小型の植物で葉を一枚つけ、花は六個つけていたが九月であつたために花期は過ぎ子房を膨らませていた。大風山は飛騨山脈における第二の産地であり、本種の北限に近いものである。

・ニシキウツギ(スイカズラ科)

本種を含むタニウツギ属植物は種により分布域がある程度限られている。タニウツギは積雪の多い日本海側を中心に分布し、県内では北信、中信北部に生育する。これに対してニシキウツギは積雪の少ない太平洋側の内陸部に分布し、県内では南信を中心に一部軽井沢、丸子町、穂高町に生育する。今回ニシキウツギがみつかった場所は常盤白沢堰堤付近で、同所にはタニウツギも生育している。両者の違いは花期にタニウツギは桃色の花をつけるのに対して、ニシキウツギの方は初め白色、後に紅色に変色するために白色から紅色に変る様々の色の花をつける。また、花のない時は葉の裏面の毛の有無によりみ分けられる。両者がこの付近に生育することは積雪と大きな関係があると思われるが、分布の上でも興味をもたれる。

・アオザゼンソウ(サトイモ科)

四月初めになると居谷里湿原では赤茶色の苞をもつザゼンソウがところどころにみられる。そのザゼンソウの中に混生して苞とその中の花序が緑がかったクリ

ム色のザゼンソウが散見できる。これはアオザゼンソウと呼ばれ本来の色素が現われず白化したもので、品種のレベルで区別される。このような現象は多くの生物で知られ、特に植物の花では時々みられる。例えばサクラソウの花は普通桃色をしているが、鷹狩山で一度みたサクラソウは白色の花をつけシロバナサクラソウと呼ばれている。アオザゼンソウはザゼンソウの群生地ではよくみられるが、特に居谷里湿原には個体数が多い。なお、鷹狩山中腹にはザゼンソウより小型で葉が展開した後に六月頃開花するヒメザゼンソウが多くみられる。

・シロバナタンポポ(キク科)

タンポポと聞くと黄色の花を思い出すのが普通で、大町市にみられる種類としては市街地にセイヨウタンポポ、郊外にエゾタンポポ、北アルプスなどの高山にはミヤマタンポポが生育している。ここに紹介するシロバナタンポポは前に述べたザゼンソウとアオザゼンソウのような関係ではなく、もと／＼白色の花をつけるタンポポで、関東以西、四国、九州にかけて分布している。五年ほど前大町市堀六日町の道ばたで一株だけみられた。これは帰化植物が外国より国内に侵入する場合、人の移動や貿易などによって無意識のうちに移動すると同様、本来の生育地より直接ないし間接的に大町まで入ってきたものと考えられる。

・キビノナツシロイチゴ(バラ科)

山地に稀にみられるキイチゴ類で、花はナツシロイチゴに似るが小葉は長卵形で裏面は初め白色を呈し後に無毛となる。長野県内では松本、東筑、小県に分布する。大町市では今まで記録がなく、鷹狩山、居谷里、小熊山でみつかり、今後調査が進めばさらに産地は増えるものとみられる。

・ヒトツボク(ラン科)

比較的明るい林床に稀に生える地生ランで、葉は一枚、花茎は高さ二十センチほどで径五ミリ

らしい花を五〜十個つける。県内では諏訪、西筑摩、伊那などの南部の分布が確認されている。大町市では鷹狩山、仏崎、西山神社でみつかった。

・キクザキイチリンソウ(キンポウゲ科)の奇形品

春先明るい林床ではキクザキイチリンソウが淡藍紫色または白色の花を咲かせる。ここに紹介する黒沢高原でみたキクザキイチリンソウはガク片二花弁様にみえるのは実はガク片にあたる)、オシベが赤色を示し弁化したもので八重咲きとなり、一見キクの花のようにみえる個体であった。

(東京農業大学植物学研究室)

博物館だより

カモシカ愛称きまる

博物館付属園で飼育中のカモシカのうち、愛称のなかつた4頭の愛称を募集したところ多数の応募があり、厳選の結果次のように決まりました。

51年6月生、オス、大(だい) 54年6月生オス岳夫(たけお) 55年8月生メス、博美(ひろみ) 56年12月捕獲メス、桑子(くわこ)、応募者の中から左記の方々に記念品のカモシカの写真がおくられました。中沢義忠、岡本いずみ、小林千景、中島桂子、内川博史、牛越篤子(敬称略)。

山と博物館	第28巻 第8号
発行所	長野県大町市 一九八三年八月二十五日発行
印刷所	長野県大町市 大町山岳博物館
定価	年額一、二〇〇円(送料共(切手不可))
	郵便振替口座番号(長野四)一三三九二